

論文

サハリンにおける「カラフト」期の 日本文化・歴史遺産を保存し利用するという視点からの 神社遺構の現況について

サマリン・イーゴリ・アナトーリエビッチ
Igor Anatolievich SAMARIN
(ロシア・サハリン州文化局顧問)

翻訳：遠坂創三（神奈川大学非常勤講師）

監修：前田孝和（非文字資料研究センター客員研究員）

一．日本時代の歴史的文化的遺産に対するサハリン州当局の対応の歴史

日本時代の歴史的文化的遺産に対するサハリン州当局の初期の対応は、明らかに否定的な性格を帯びていました。このことは、郷土博物館長 S.M. クラフチェンコからサハリン州文化教育局長 E.I. アンクツデノワ宛に提出された 1948 年 12 月 13 日付の報告書、『サハリン島南半分における歴史的文化的遺物の保存について』が示しています。そこには次のような記述があります。「サハリン島南半分には、どの町にも、特にユジノ・サハリンスク市〔豊原〕（公園）には、大量の大理石、御影石、玄武岩の記念碑がある。こうした記念碑の大多数は、当然のことながら、われわれにとっては意味を持っておらず、処分されるべきである。」

戦後まもなくの頃、サハリンの学者たちは、建築学的に最も興味深い寺社建造物を保存しようと試みていました。たとえば、ソ連科学アカデミーサハリン科学研究拠点は、「学術研究機関の民俗学的興味ならびに日本の宗教に関する重要な歴史記念物としての（仏教及び神道）寺社遺構の保存という観点から」と理由付けて、ユジノ・サハリンスク市にある全ての寺社所有物といくつかの寺社を、同



写真1 旧弘法寺（古義真言宗 豊原市東6条南10丁目）
は住居として使用されていた。1974年撮影 豊原＝ユジノ・サハリンスク



写真2 旧乗願寺（真宗本願寺派 豊原市東1条南10丁目）
は郵便局として使用されていた。1974年撮影

^{(監修者注(1))}拠点に移管するよう申請しました。学者たちの建造物移管に関する要請は却下されたままになりましたが、寺社調度品については認められることとなり、1952年12月にレニングラード市に送られ、現在、ピョートル大帝記念人類学・民俗学博物館（クストカメラ）の所蔵品になっています。

その後の寺社の運命は、大半が事務的かつ実用主義的に決められていきました。神社の一部は解体され、薪や建築材料になりましたが、いくつかの仏教寺院は、1970年代までさまざまな事務所や住居として利用されていました。1974年に、都市建設・建築科学研究所（モスクワ市）の研究員 V. L. ヴォロニナが、いくつかの旧仏教寺院を調査し、それらの歴史的、文化的意義を認める査定書を作成しました（写真1、2）。

ソ連時代には、歴史的対象物を公的保護の下に置くのに、通常、問題はなかったのですが、日本関連の物件の場合には、そうはならなかったのです。

ソ連当局の日本時代の遺産に対する冷淡で軽視的な対応は、1937年に貝塚良雄^{かいづかよしお}の設計で建てられたサハリン州郷土博物館（旧樺太庁博物館）の建物の再建計画のいきさつに、特にはっきりと現れていました。

1978年4月4日付のユジノ・サハリンスク市ソビエト執行委員会決定第98号に基づき、《サハリン^{(監修者注(2))}グラジダンプロジェクト》研究所によって『州郷土博物館再建・拡張プロジェクト』が作成されました。州の建築家たちは博物館を、いわゆる「発達した社会主義」期の典型的な公共建築物に変身させるようなファサードの意匠を4案提示しました（写真3）。

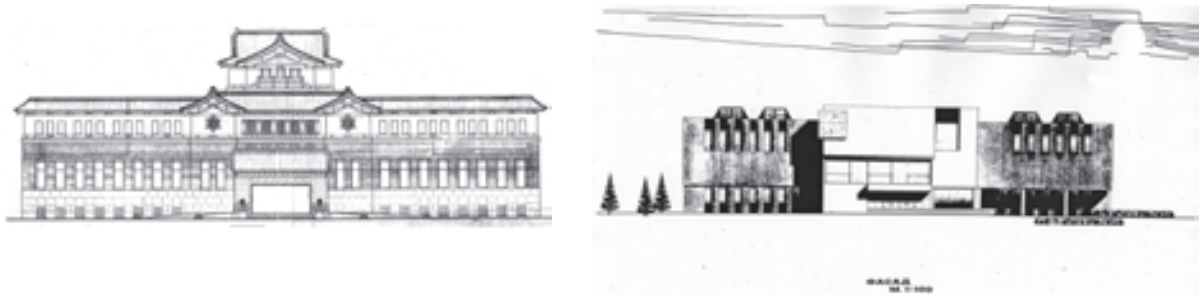


写真3 サハリン州郷土博物館（旧樺太庁博物館）と1978年の博物館再建プロジェクトの一案

1985年4月に M. S. ゴルバチョフの主導により開始されたソ連社会のペレストロイカ（改革）は、わが国の社会政治体制に大きな変化をもたらしました。その民主的変革は、多くの公然、非公然の禁止事項からの解放をもたらし、個々の歴史テーマの研究も解放されました。そのテーマの一つが、樺太庁時代（1905年～1945年、以下「カラフト期」と記す）の日本による南サハリン殖民の歴史でした。政治状況の変化に伴い、文化的価値体系のなかでの日本時代の物件の意味付けを見直し、これらの物件は、サハリン州の文化遺産の一部をなすものだという理解が広がりました。

日本時代の文化遺産の保存に係る、サハリン州執行委員会の最初の決定は、1990年3月28日に採択されました。その際、サハリン州文化局が主導して、国の保護下に置かれる歴史的物件リストに「ライオン^{(監修者注(3))}の石造を伴う博物館の建物」が入れられました。一言付け加えると、サハリン州郷土博物館の入り口に置かれた樺太〔護国〕神社の「守護獣」である狛犬^{こまいぬ}（高麗犬^{こまいぬ}）が情報不足のため、書類上誤ってライオンと記されており、また、左右の犬が入れ替わって設置されていました（写真4）。2006年の博物館の修復の際に、狛犬は、ようやく神道の決まりに従って設置されたのです。



写真4 1930年代の招魂社（豊原市大字豊原）の狛犬と、サハリン州郷土博物館（旧・樺太庁博物館）に移設された当初の狛犬。左右逆に設置されていたが、現在は正しく置かれている。1996年撮影
招魂社は指定護国神社に指定（1939年）されると、樺太護国神社と改称した。

カラフト期の記念物を発見し研究するうえで大きな役割を果たしたのが、サハリン州郷土博物館と北海道開拓記念館（現・北海道博物館）との間で結ばれた研究協力協定に基づいて、初めて実現したロシアと日本の学者間の交流でした。考古学の分野で初めての協力協定が、V. M. ラツイシェフ館長と^{わたなべ さたけろう}渡邊左武郎館長との間で、1990年にユジノ・サハリンスク市で結ばれました。サハリン側からの提案により、日本側研究者グループには、考古学者のほかにも、建築学と歴史学の専門家も入りました。まさにこうした方々のおかげで、カラフト期の文化遺産についての情動的、科学的ベースができあがっていったのです。

1996年から、^{こしのたけし}越野武教授と^{かどゆきひろ}角幸博教授を中心とする北海道大学の研究者グループが南サハリンで活動し始めました。このグループによって樺太庁に関する相当量の一次資料や文書資料が集められ、何十にも及ぶ日本時代の物件が調査されました。

日本時代の物件を国の保護下に置く一連の決定の一つが、1999年3月12日付サハリン州知事令第80号『地域的意義を有する記念物として公的保護を受けるサハリン州の歴史文化記念物について』により下されています。このときのリストには、コルサコフ市〔大泊＝オオドマリ〕とユジノ・サハリンスク市の銀行の建物が入っています（大泊の銀行については130頁参照）。

1998年11月に『ロシア連邦サハリン州と日本国北海道間の友好及び経済協力協定』が結ばれました。この協定に基づいて、北海道大学が、旧カラフト住民についての長期間にわたる共同研究を行うことをサハリン州当局に提案してきました。サハリン州当局の手配により、ロシア側専門家のワーキンググループが編成され、1999年5月から露日共同調査団の調査が行われるようになりました。

2000年5月に州文化局により開かれた学術報告会「サハリンの文化：過去の経験、未来への視線」の総括において、初めて、文化遺産としての特質を有する17の神社を含む、樺太庁



写真5 旧^{なすとろ}恵須取町の太平国民学校の奉安殿 2013年撮影
※監修者注＝恵須取町太平には国民学校は太平第一国民学校と太平第二国民学校があったが、写真の奉安殿は、いずれかは不明。恵須取＝ウグレゴルスク

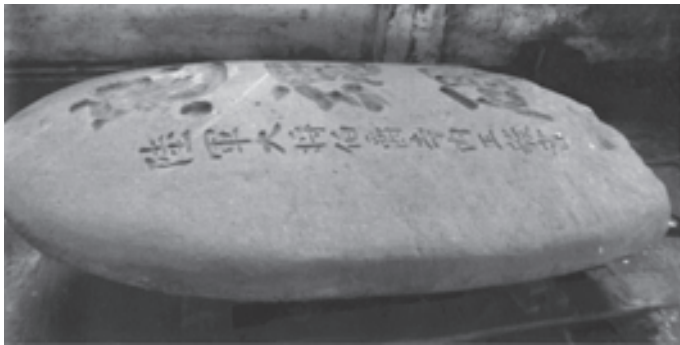


写真6 ^{ほんと}本斗神社（本斗町大字本斗）の忠魂碑と本斗神社。本斗＝ネベリスク

期の53件の物件リストが発表されました。現在では、このリストは更に大幅に拡大され、サハリン州における既発見の文化遺産リストに繰り入れられ、ロシア連邦諸民族文化遺産の全国単一目録に組み込むための書類の作成作業が始められています。

前後するが、歴史的文化的意義という観点から文化遺産としての特質を持つ日本時代の遺産物件の発見作業は、1994年にサハリン州郷土博物館歴史部により始められ、現在も州文化局により続けられています。そのうちのいくつかを取り上げると、2013年10月に、旧太平炭鉱の小学校にあった「御真影奉安殿」が見つかり（写真5）、2014年夏には、ネベリスク市〔本斗〕にあった本斗神社の石碑「忠魂碑」の存在が明らかにされました（写真6）。現在では旧神社敷地に別の建物が建っているため、石碑は、市博物館に隣接して設置されることになっています。

クラフト期の文化遺産に対するサハリン当局の関心が特にはっきりと現れ始めたのは、2005年の春、「サハリンにおける日本時代の文化遺産物件の復元、修復及び保存」をテーマとして、B.V. ゴルクノフ第一副知事を議長とする作業部会が設置され、会合が何回かもたれた時です。同じ頃、サハリン州郷土博物館建物の修理修復作業を開始するようサハリン州当局から州文化局へ指示が下されています。

クラフト期の物件保存問題は、サハリン州知事直属のサハリン州歴史文化遺産保存専門家会議で審議されています。2008年6月16日の会合では、旧トマリオル〔泊居〕神社遺構の一部であり、危機的状態にある「戦勝記念碑」（日露戦争）石塔の保存問題が検討されました（写真7、8）。

会議では、専門家たちが、日本時代の石塔「戦勝記念碑」（日露戦争）をサハリン州の文化遺産の



写真7 ^{とまりおろ}旧泊居神社（泊居町大字泊居）の復旧前の「戦勝記念碑」 2010年撮影 泊居＝トマリ



写真8 「戦勝記念碑」が建っていた土手の法面は浸食されて危険な状態となっていた。



写真9 復旧工事中の泊居神社の「戦勝記念碑」 2011年撮影



写真10 復旧工事中の泊居神社の「戦勝記念碑」2011年撮影



写真11 復旧工事が終わり倒壊の恐れはなくなった「戦勝記念碑」

一部とするという州文化局の提案に同意し、トマリ市〔泊居〕当局に、その石塔の安全な場所への移動を手配するよう推奨しました。この移動は、2011年11月に実行されました（写真9、10、11）。

かくして、この60有余年の間に、カラフト期の物件に対するサハリン州当局の姿勢は根本的な変化を遂げています。日本時代の物件を破壊し文化的に無個性化しようとする姿勢から一

転し、保存すべきサハリン州の文化遺産の一部なのだという理解に到達したのです。この方向での私たちの共同の努力が実りをもたらすことを信じたいと思います。

日本時代の記念物を保存するうえで特別な役割を果たしているのが、サハリン州文化局によって毎年開催されている、カラフト期の歴史文化遺産の保存に関する国際シンポジウム（写真12）です。シンポジウムが初めて開かれたのは2008年10月で、今年（2014年）は、7回目の開催となりました。

2009年に札幌で開催されたシンポジウムでは、カラフト期の記念物を保存するというコンセプトが大きく唱えられました。というのも、1905年から1945年の南サハリンの日本による統治期間は、歴史研究者や、郷土研究家、建築学者などだけでなく、サハリン州の住民、ロシアや外国からの旅行者たちの変わらぬ興味をも引き続けているからです。

建造記念物の保存状態は、強い憂慮の念を抱かせるものとなっています。破壊されたり、改築により乱暴に変えられてしまった記念物は、それが果たすべき高度な人文学的役割を果たせないというだけでなく、記念物の喪失とともに、それが負っているユニークな科学的、技術的その他の情報も失われてしまうということな



写真12 第4回カラフト期の歴史文化遺産の保存に関する国際シンポジウムユジノ・サハリンスク 2011年

のです。

こうしたことと関係するサハリン州文化局の活動の出発点は、日本時代の歴史的文化的遺産の復元、修復、再生、また、住民がそれらの遺産とともに生活し、休息し、誇りと愛郷心を感じ育むことが自然にうまく行われるよう、生活圏に組み込むことにあります。2014-2020年の国家計画として《サハリン州における文化分野の発展》が作成されるにあたって、サハリン州文化局の権限に属するカラフト期記念物の修復がその一項に入った理由もそこにあります。

ですから、州文化局は、カラフト期記念物の保存と利用のコンセプトを検討するにあたって、日本時代の歴史的文化的遺産の保存問題を複合的な視点で解決していくという目的を立てています。

この目的を達成するためには次のような課題を解決する必要があります。

- 州内の文化遺産物件の存在及び保存程度を登録する単一の方式を創設すること。これにより、その効果的な利用とその物件保存のための財政措置を調整するうえで、信頼できる決定を下すことができます。
- 目録文書の作成
- 対象物件敷地の境界及び保護ゾーンの設定
- 一連の記念物件をロシア連邦諸民族の全国単一目録（文化遺産物件、歴史文化記念物）に組み入れる可能性を得るために、証明書の作成と歴史的文化的価値の鑑定を行うこと
- 歴史文化遺産の保存維持を確保するための条件作り
- 日本時代の物件の修理（修復）と整備
- 日本時代の遺産の研究に関する、また、記念物の公的保護に関するさまざまな問題を研究するカタログ、書籍、小冊子その他の印刷物の出版。この点については、今年（2014年）の末に、カラフト期の歴史的文化的遺産物件のガイドブックが出版されることになっており、神社の遺構、建築学的な記念物、橋、学校にあった「御真影奉安殿」、その他さまざまな記念碑など117の日本時代の物件に関する情報が記載される予定です。

こうした施策の財源は、サハリン州予算にあります。

日本時代の物件に関して私たちが取っている措置を理解するうえで重要な意味を持っているのは、



写真13 旧大泊の北海道拓殖銀行大泊支店 大泊＝コロサコフ

個々の物件の保存状態、その歴史的文化的価値、そして今後の利用の可能性です。この関係で代表的な例が、1929年に建てられた、コロサコフ市〔大泊〕にある旧「北海道拓殖銀行大泊支店」の建物です（写真13）。

2012年4月にサハリン州文化局は、この建物を全面的に修復し、博物館として利用すべく作業チームに引き渡しました。現在、モスクワの修復工房の専門家たちによる設計が完了し、建物の修復作業の準備が行われています。

二. 神社遺構の修復・整備

神社の遺構への対応はやや異なっています。私たちには、日本時代の宗教的物件のもともとの風貌を復元するという課題はありません。なぜなら、それは日本の精神的、文化的、技術的伝統に関わることだからです。しかしながら、残存している遺構の部分的な修理、敷地の整備、そしてこれらの物件を観光目的で今後利用していくための条件作りは十分正当化され得るものです。

私たちは、カラフト期の文化遺産のうち、以下の物件での修復、整備、利用のための作業が優先的に進められるべきだと考えています。

ユジノ・サハリンスク [豊原] 市：

- 神道神社「招魂社」(樺太護国神社) 遺構 (市病院裏)。敷地の整備 (写真 14)。
- 王子製紙創建記念碑の復元、豊原市公園



写真 14 旧樺太護国神社 (豊原市大字豊原) と、そのコンクリートの基壇と石造の手水鉢

コルサコフ [大泊] 地区：

- メレイ [女麗]^{(監修者注(4))} 神社遺構 (写真 15) と日本の上陸部隊上陸記念標識「日露戦役樺太遠征軍上陸記念碑」(写真 16)

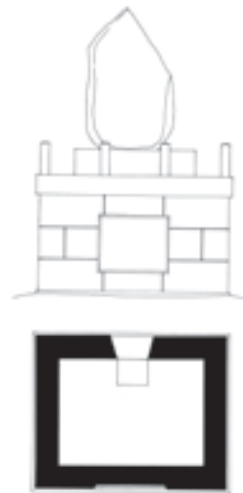


写真 15 旧女麗神社 (深海村女麗) の神社遺構 (忠魂碑と石室) とその復原図画 女麗 = プリゴロドノエ



写真16 旧女麗の「日露戦役樺太遠征軍上陸記念碑」と倒壊した上陸記念碑

メレイ〔女麗〕神社遺構。これは石塔「忠魂碑」と現地出身兵士の戦没者名簿を収納するための石室がある基礎部分からなっています。かつて、この神社遺構（石塔・忠魂碑と石室）は参道沿いにありました。現在石塔は基礎部分礎石から落ちた状態です。

日本の上陸部隊記念碑は、サハリン州の文化遺産の中でもユニークな物件です。南サハリンで最も古い（1926年建立）記念碑の一つであるこの石碑は、日露戦争（1904-1905年）時の事件であり、サハリンの歴史上でも特筆される悲劇的なエピソードの一つを物語っています。^{（監修者注(5)）}メレイ〔女麗〕川溪谷の段丘上に設置された記念碑は、地域の主要な歴史遺物です。今日では、コルサコフ地区〔大泊〕で最も多くの訪問者を集める観光物件の一つになっています。というのも、幹線道路のすぐそば、市のビーチに隣接していて、遠くからも良く見え、「サハリン-2プロジェクト」（訳注：石油ガスプロジェクト）による活発な経済活動が営まれている地域内にあるからです。



写真17 旧長浜神社（長浜村大字長浜字池辺譚）の忠魂碑 長浜=オジョールスキー

統一された歴史遺跡複合体を形成するためには、区域の整備、石塔の復元、基礎ブロックの部分的な復元、案内板の作成と取り付けなどが必要です。いくつか、具体例をあげると

- オジョールスキー村〔長浜〕におけるチ^{（監修者注(6)）}ペサニ〔長浜〕神社遺構。村役場の建物に隣接しており、州内では最大の「忠魂碑」石塔があります。石塔の復元、敷地の整備、案内板の設置が必要です（写真17）。

ドリンスク [落合] 地区：

- 一 ブズモーリエ村 [白浦] における東白浦神社遺構。土中からの掘り出し、プレートの設置、敷地の整備、案内板の設置が必要です (写真 18、19、20)。



写真 18 旧東白浦神社 (白縫村大字白浦字白浦区画外)
の明神鳥居 東白浦=ブズモーリエ



写真 19 落下している東白浦神社の扁額



写真 20 東白浦神社の石造物の石片



ネベリスク [本斗] 地区：

- 一 シラヌシ地区 [白主] における記念標識「開島記念塔」遺構。石塔の復元、敷地の整備、案内板の設置が必要です (写真 21、22、23)。

そのほかに、私たちは、マカロフ [知取=シリトル] の知取神社 (写真 24、25)、ウグレゴルスク [恵須取=エストル] の恵須取神社 (写真 26、27)、ネベリスク [本斗] の本斗神社 (写真 28)、ホルムスク [真岡] の真岡神社の遺構に案内板を設置する計画を立てています。案内板には、神社の名称、創建の年、神社の祭神、その外観などを表示します。



写真21 旧白主にあった開島記念塔（写真左、樺太開拓の先駆者である間宮林蔵並びに松田博十郎等による樺太開拓の足跡を記した記念塔、好仁村自主）、海岸に倒壊した尖頭の一部（写真中央）、記念塔基壇に尖頭の部分を設置した（写真右） 白主＝クリリオン



写真22 明治初期の白主の弁天社の絵図（出典：林頼三『北海紀行』の付録「樺太州西海岸自主之圖 1874年 如蘭堂」とその付近で発掘された飾り金具（監修者注：工芸品に飾られた金具か）



写真23 旧西能登路岬南端の絵図「白主ノトロ岬」（弁天社も描かれている）。目賀田帯刀の『延叙歴検真図』（1856年 1872年に清書し開拓使に提出した）と発掘された銅鏡の破片 西能登路岬＝クリリオン



写真 24 旧県社・知取神社（知取町大字知取字末広町区画地）の参道 知取=マカロフ



写真 25 知取神社の遺構



写真 26 旧県社・恵須取神社（恵須取町大字恵須取）の鳥居 恵須取=ウグレゴルスク



写真 27 恵須取神社の遺構



写真 28 旧本斗神社（本斗町大字本斗）の本殿基壇。
基壇の背後にはロシア正教会の教会が建てられている。
本斗=ネベリスク

三. おわりに

期待される最終的な結果：

- 一 州内文化遺産の存在と保存程度を登録する単一方式の創設。これにより、その効果的な利用と物件の保存のための財政的措置を調整するうえで信頼すべき決定を下せるようになる。

- 一 カタログ、書籍、小冊子その他の印刷物の刊行、遺産の研究、記念物の公的保護に関するさまざまな問題を議論する学術的実践的会議の開催などを通じ、歴史的文化的記念物に関する情報を普及する。
- 一 広範な住民各層、特に若年層の間に文化遺産に対する尊敬の念と大切に扱う気持ちを育て、その保存に関心を持つような社会的雰囲気醸成する。

以上のような諸施策の実施が、アジア太平洋地域諸国の島々と大陸を結ぶ交差点としてのサハリン州の意義を更に強め、諸民族間、諸国間の結び付きを発展させ強めるのに寄与し、カラフト期の歴史文化遺産の保存問題への新たなアプローチを可能にしてくれることであろう。

※ 訳注：[] 内は旧地名。

監修者注

- (1) 景德寺（曹洞宗）とその附属施設を保管保存する計画があったことは、サハリン州国立文書館のロシア語宗教関係文書綴の「1947年第4四半期現在のサハリン州の宗教組織の活動状況報告書No.3」（『樺太の神社』北海道神社庁 2012年 579頁）に記載されている。
- (2) 博物館再建・拡張プロジェクトは、1990年に現博物館を改修して存続することに決定された。
- (3) 狛犬の起源は、古代オリエント・インドのライオン像であるが、中国では唐風の獅子となり、朝鮮半島を経由して日本に入ると狛犬（高麗犬・こまいぬ）と称するようになった。
- (4) 旧大泊郡深海村女麗には海岸近くの小高い丘に女麗神社（深海村女麗）と山奥の「鳥居沢」に八幡神社（深海村女麗字鳥居沢）があった。サマリソフ氏のロシア語原文には女麗の八幡神社とあるが、日露戦役樺太遠征軍上陸記念碑と忠魂碑は海岸近くの女麗神社付近にあった。そのため本文の八幡神社は女麗神社であり、サマリソフ氏の勘違いと推測される。なお、女麗神社は、1923年5月19日創立で、祭神は御食津神、東伏見宮依仁親王、西久保豊一郎命である（後掲写真33～35参照）。
- (5) 日露戦争が終結に向かう中で、1905年7月7日～31日の間に日本は講和条約交渉を有利に運ぶために樺太に上陸・占領した（「樺太の戦い」）。日本軍は7月7日に樺太南部のアニワ湾に上陸、そしてコルサコフ（大泊）、ウラジミロフカ（豊原）を占領し、7月31日にロシア軍は降伏した。この戦いで戦死した西久保豊一郎少佐を称え、西久保神社（軍川）、樺太護国神社（豊原）、女麗神社（女麗）、追分神社（追分）に祀られた。
- (6) チベサニは、「長浜」と名付けられる以前のアイヌ語の地名。

※ サマリソフ氏の写真説明（英文）中、明らかに勘違いと思われる2点については監修者の責任で訂正した。写真1の乗願寺を弘法寺に、写真18の巖島鳥居を明神鳥居にそれぞれ変更した。また写真2の寺院は真宗本願寺派の寺院であるので、寺名を乗願寺とした。

※ 本文は、2014年11月22日に開催された第4回公開研究会「旧樺太（現ロシア連邦サハリン州）における神社の創建と跡地の現況」におけるサマリソフ氏の報告『旧ソ連邦時代の神社政策と神社跡地の現況について』を原稿化したものである。尚、章立ては監修者が付けた。

※ 後掲[写真資料]の写真29～39は、公開研究会の際、サマリソフ氏が映した写真である。

〔写真資料〕



写真 29 ^{しりとる} 旧知取町の水天宮 知取=マカロフ



写真 30 水天宮 コンクリートの階段



写真 31 水天宮 狛犬の基壇(?)には渡辺組の社紋等が刻まれている。



写真 32 水天宮 一間四方の基壇



写真 33 ^{いくさがわ} 旧軍川付近の小さな参道(西久保神社の参道か) 軍川=ダルネエ



写真 34 旧西久保神社(豊原市大字軍川字軍川、祭神は西久保豊一郎命ほか)と軍川付近の地図(『樺太5万分の1地図』図書刊行会1983年 陸地測量部作製「五万分一地図」(1941年)の複製版)



写真 35 旧西久保神社と旧神殿のあった付近



写真 36 旧麻内神社跡（本斗町大字麻内字麻内）。個人の住宅が建てられており、コンクリートの階段が見える。麻内=ザウェティイルイチャ



写真 37 旧彌満神社跡（知床村大字彌満）。手前に狛犬か何かの基壇が、奥にコンクリート階段が見える。彌満=ノビコボ



写真 38 旧久良志稻荷神社跡（野田町大字久良志）と神社遺構 野田=チェーホフ

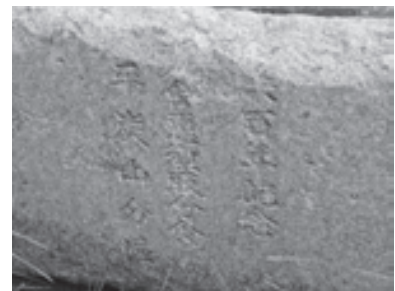


写真 39 旧炭山神社跡（恵須取町太平）と神社遺構 恵須取=ウグレゴルスク